

階層分析を用いた敬語学習支援システムの改善

Improvement of honorific study support system by hierarchical analysis chart

社会情報システム学講座 0312001174 山崎 美子

指導教員: 鈴木克明 藤原康宏 市川尚

1. はじめに

現在, 敬語に関する本や教材等は多数存在する。しかし, 国語の教科書をはじめ, 本・教材等の多くは, 文字の量が多く途中で飽きてしまったり, 敬語の基礎知識は学べても, それを使う具体的な場面設定がないため, 敬語の知識はあるのに日常生活で使えないという状況にある。

コンピュータを使った様々な教材も開発されており, 『心とことば』¹⁾は, 日常生活のなかで実際に敬語を使ったシチュエーションを再現している。しかし, 実際に『心とことば』を使ってみたところ, 機能も内容も他のソフトウェアと比べて充実しているにも関わらず, 敬語を話せるようにならなかった。そこで, 『教材設計マニュアル』²⁾に沿って, 階層分析をし, 『心とことば』の改善を行うことにした。

2. 設計

2.1. 『心とことば』の問題点

『心とことば』で敬語を話せるようにならなかった原因を考えたところ, 以下のような問題点が挙げられた。

一つ目は, システムを一通り使い終わっても達成感を感じないという点である。その理由として, システムの学習目標(出入口)が明確になっていないからなのではないか, と考えた。

二つ目は, フィードバックが少ないという点である。不正解時に間違えた理由が与えられないため, 自分の苦手な部分がわからず, 苦手な部分を重点的に学ぶということができない。

2.2. 「敬語学習」の階層分析

学習目標の明確化を行うため, 敬語の指導方法を研究している文献を参考に学習目標となる項目を洗い出し, それらをすべて統合し, 階層分析図を作成した(図1)。

教材の最終目標を, 「シチュエーションによって適当な待遇表現を使い分けことができる」とした。この目標をマスターするために2つの下位目標「正確な敬語を使うことができる」, 「待遇的意味の種類によって適当な待遇表現を使い分けことができる」を設けた。これらは独立していて, どちらの目標からやっても良い。そして2つの下位目標がクリアできたとき, 最終項目に進むことができる。

シチュエーション(場面、人物等)によって
適当な待遇表現を使い分けことができる

図1 階層分析図

また、敬語学習は複雑だが構造的になっていて、これらは学習順序が決まっており、正しい順序で学習するべきである。

2.3. 『心とことば』の改善

『心とことば』と階層分析図を比較すると、『心とことば』には、敬語の基本ルールの説明が少ないことがわかった。そこで、敬語の基本的な知識が学べる「敬語のルール」を新たに追加した。また「待遇表現の使い分け」は、正答が表示されないため、独学には向いていないと考え、独学を支援するよう改善を行った。

また『心とことば』にはなかった、学習順序のサポート、目標に対する達成度の表示、不正解時のフィードバックを追加した。

3. 開発

3.1. 「敬語のルール」の開発

Macromedia 社の Flash MX を用いて「敬語のルール」を階層分析図に沿って開発した。

丁寧語・尊敬語・謙譲語の基本的な認識を萩野³⁾の敬語のしくみ図を用いてわかりやすく説明し、それをクリアした後、丁寧語・尊敬語・謙譲語の基本的表現をそれぞれ学んだ後、それらを使い分ける練習をする。最後に、丁寧語・尊敬語・謙譲語の区別と、正しい敬語表現を使い分けることができたとき、「正確に敬語を使うことができる」と判断する。

3.2. 階層分析図の活用

学習者が、学習の状況がわかるようにボタンの色分けを行い、階層分析図に沿って、次に学習するのが適切なボタンをオレンジに、適切でないボタンは半透明に、既に終わったボタンは茶色にした(図2)。

また適切でないボタンを押した時は、最初に



図2 敬語ルールのトップ画面

学習した方が良い項目を示すなど工夫をした。

3.3. 練習機能

それぞれの練習では学習目標の種類によって出題形式を変えた。例えば、「敬語の使い分け」では、尊敬語と謙譲語の区別と、色々な言葉を基本的表現に適応させ敬語に直す出題形式をとった。

また、不正解だったときの画面に、なぜ間違いなのかの説明と、正答の表示、さらに、その問題に関連する目標項目のボタンを表示するなどして、前に戻れるようにした(図3)。

4. 評価と改善

「敬語のルール」の開発が終了した時点で評価を行った。まず、開発した教材がきちんと動くかを確認する1対1評価²⁾を行い、次に、既存教材より改善版教材の方が学びやすくなっているかどうかを調べる小集団評価²⁾を行った。

その結果、階層分析図に沿った学習について、好意的な意見が得られた。評価で得た意見を参考に改善を行い、「待遇表現の使い分け」も同様に開発を行った。

5. おわりに

本研究では、階層分析を用いて『心とことば』の改善版の開発、評価を行った。学習の成果が日常生活の中で実際に使えるようになったかを調査することが今後の課題である。

参考文献

- 1) 『心とことば～敬語の使い方～』日本文教出版社(1998)
- 2) 鈴木克明:教材設計マニュアル-独学を支援するために、北大路書房(2002)
- 3) 萩野貞樹:みなさんこれが敬語ですよ、二見書房(2002)

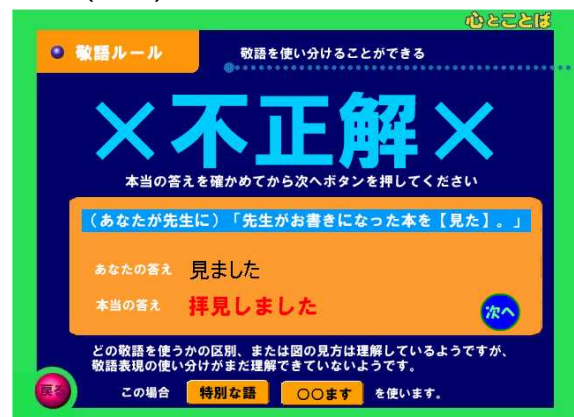


図3 不正解時の画面